

彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

# 特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

— 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 —

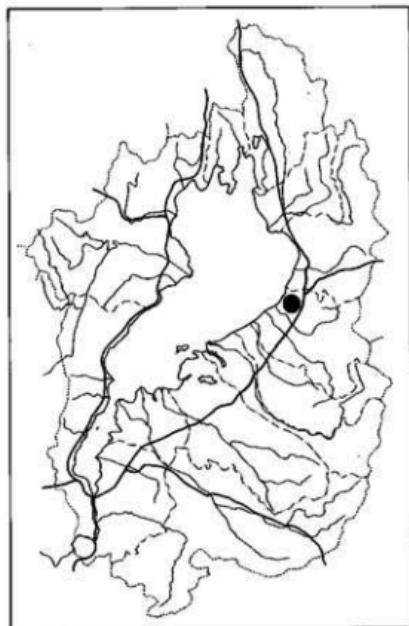
1985

彦根市教育委員会

彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

# 特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

— 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 —



1985

彦根市教育委員会

## 序

彦根は、古来より都と東国・北国などを結ぶ要衝の地として、幾多の政争の舞台となりました。近世に入っても徳川幕府はこの地を重視し、徳川譜代筆頭の井伊直政を封じ、以降廃藩置県に至るまで井伊家が彦根藩を領してきました。その治世を通じて、彦根城を中心とする城下町が形成されました。城下町の主要部は、現在、特別史跡彦根城跡に指定されています。その地中には、近世彦根藩の歴史が数多く埋もれていることでしょう。

従来、埋蔵文化財の発掘調査といえば有史以前と考えがちでしたが、昨今では中・近世の調査が文献資料を補う形で急速に増加し、新知見をもたらしております。彦根市内においても例外ではなく、本書も又、そうした成果の一端を収めたものです。今回の調査は、特別史跡彦根城跡の一隅に位置する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に先達って実施しました。調査域が旧校舎の建っていた位置にあたるため、遺構の残り具合は余り良好とは言えなかつたが、それでも近世武家屋敷の様相を知る幾つかの貴重な資料を得ることができました。本書が、研究者のみならず多くの方々に活用され、埋蔵文化財および近世史に対する理解が更に深められるよう願うものであります。

最後に、この調査にあたり、多大な協力を賜った関係者のみなさんに対し、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

彦根市教育委員会

教育長 河 原 保 男

## 例　　言

1. 本書は、特別史跡彦根城跡内に所在する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に伴って実施した発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本調査は、彦根市教育委員会社会教育課が実施した。
3. 現地調査および整理・報告書の作成は、社会教育課技術係員・谷口　徹が担当した。
4. 調査・整理には、調査協力員・桂田峰男氏（現山東町教育委員会）の協力を得たほか、原　彌助・立岩義一・久米正雄・辻森敏雄・北川正吉・久米たつ枝・寺村千紗子・大堤須美子・森うた・円城伸彦・沢田具高・鶴野浩司・田中義次・林孝好・長野忠義・黒田昌宏・植野克志・吉岡俊幸・安田正利・伏木和子・川村和枝の諸氏が参加した。又、遺物の保存処理については滋賀県埋蔵文化財センター中川正人氏を、遺物写真については海福　滋氏をそれぞれ頼した。記して感謝の意を表したい。
5. 本書の執筆・製図等は谷口が行ない、付章については近江八幡市立郷土資料館・江南　洋および（財）滋賀県文化財保護協会・近藤　滋の両氏にお願いした。

## 目 次

序	1
例 言	
I. はじめに	1
II. 歴史的環境	5
III. 検出遺構	6
IV. 出土遺物	17
V. 考 察	21
付 章	29

## 挿 図

図1. 調査位置図	1
図2. 彦根城第1郭・第2郭復原図	2・3
図3. 現況地図に「御城下懸絵図」の屋敷割りを加えた地図	4
図4. 調査トレンチ設定図	5
図5. 特別教室棟区遺構全図	7
図6. 土壙断面図	8
図7. 管理棟区遺構全図	11
図8. 井戸・便槽等実測図	13
図9. 漆喰池実測図	15
図10. 出土木製品実測図	19
図11. 彦根城表御殿跡(部分)坪庭位置図	23
図12. EX. 3漆喰池実測図	24
図13. EX. 4漆喰池実測図	25
図14. EX. 5漆喰池実測図	26
図15. 付章関係遺構全図	30
写真1. SK08出土の漆塗	14
写真2. 市内現存の武家屋敷内坪庭漆喰池	27

## 図 版

PL. 1 遺構. 1. 特別教室棟区全景	2. 管理棟区全景
PL. 2 遺構. 1. SD03	2. SD04
PL. 3 遺構. 1. SE01	2. SE02
PL. 4 遺構. 1. SE03	2. SL01
PL. 5 遺構. 1・2. SX01	3. SX03
PL. 6 遺構. 1. SX02 2. SX04 3. SP01 4. SP02	
PL. 7 遺物. P01～P04. E01	
PL. 8 遺物. P05～P07. P10	
PL. 9 遺物. P08・P09. E02. W01～W03. W05	
PL. 10 遺物. P11・P12. W04. W06	
PL. 11 遺物. P13～P15. W07	
PL. 12 遺物. PW01・PW02	

## I. はじめに

本報告書は、彦根市金龜町8番2号に所在する彦根市立彦根西中学校の校舎改築に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

彦根城下は、天守を中心とする第1郭、次いで内濠から中濠に至る第2郭、中濠から外濠に至る第3郭、外濠以外の第4郭に大きく分類される。第2郭は家老以下1,000石前後の高様の土分の邸宅が置かれた他、藩主の別邸櫛御殿や作事小屋などが配置され、第3郭は武家屋敷及び町屋が、第4郭は町人を主体に比較的身分の低い土分の住地や足軽の組屋敷が広がっていた。<sup>注①</sup> 調査地は第2郭内に位置し、「御城下惣絵図」によると、江戸時代末期（天保7・1836年）から明治時代初頭にかけて、印其寿之介・吉田六郎・天野康文・庵原乾三郎などの邸宅跡に相応する（図2参照）。なお、現在、第1郭・第2郭に第3郭の「埋木舎」を加えた地は、国の特別史跡に指定されている。

校舎の改築工事は、特別教室棟と管理棟の2ヶ所を計画しており、工事工程の合間から、発掘調査は、特別教室棟については昭和60年3月22日から3月30日まで、管理棟は同年8月7日から9月7日まで実施し、以後整理作業を行なった。調査は、いづれも旧校舎の建っていた位置にあたるため、大規模に搅乱を受けていたが、II章以降に詳述するような成果を得ることができた。

注① この絵図は6幅からなり、藩士と一般の町人の名や屋敷の規模が明示されている。（彦根市立図書館蔵）

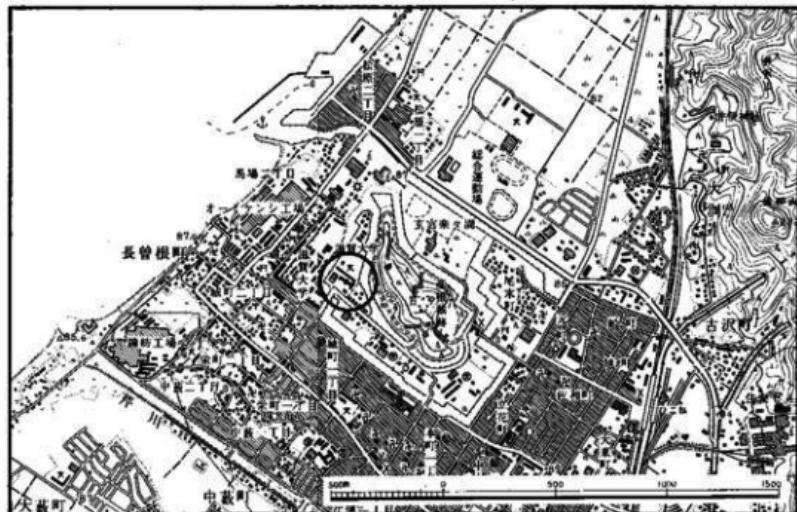


図1. 調査位置図

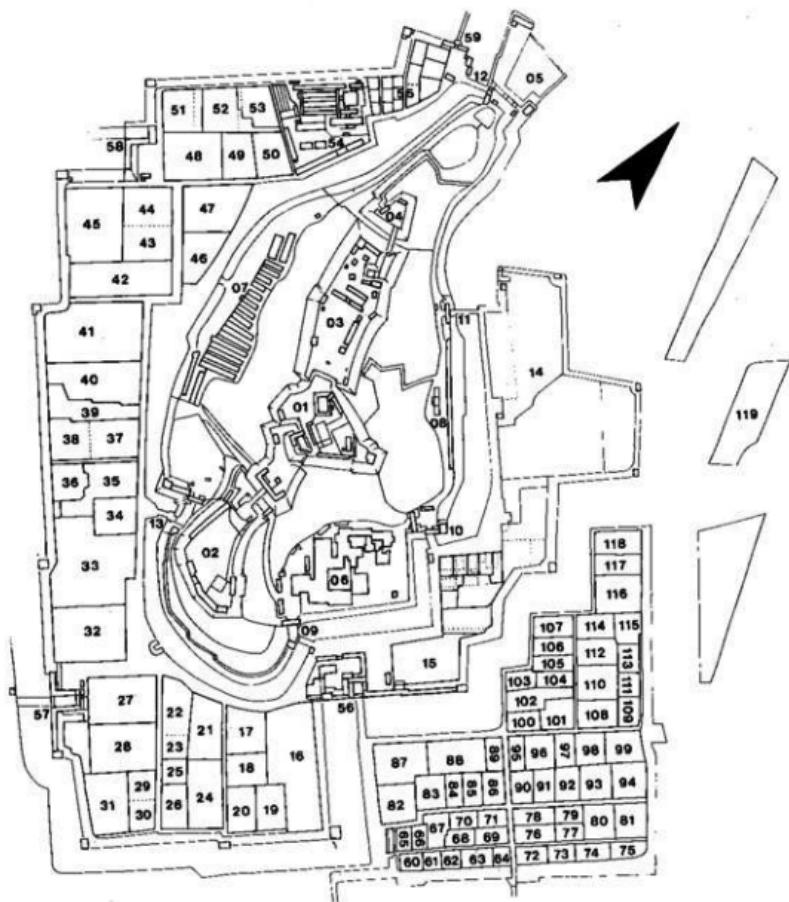


図2. 稟根城第1郭・第2郭復原図  
 (ただし、第1郭は文化11(1814)年御城内御絵図、  
 第2郭は御城下懸絵図の内絵図を合成したもの。)

- |                   |                   |                    |
|-------------------|-------------------|--------------------|
| 01. 本丸            | 41. 中野若狭          | 81. 仙波佐介           |
| 02. 錠の丸           | 42. 武節賀治          | 82. 藤原次一・鷹藏人       |
| 03. 西の丸           | 43. 小野田甚之助→小野田小一郎 | 83. 増田祝之介          |
| 04. 人質館           | 44. 岩本半介          | 84. 小森和次郎          |
| 05. 山崎郭           | 45. 宇津木下總→宇津木猛雄   | 85. 曽根七郎平          |
| 06. 表御殿           | 46. 岩本半介→石上省己     | 86. 青木半十郎          |
| 07. 米蔵            | 47. 岩本半介          | 87. 三浦与右衛門         |
| 08. 材木蔵           | 48. 印只寿之介(直琴母の里)  | 88. 御屋敷(堀木舎)大久保幸男  |
| 09. 表門            | 49. 酒居右膳          | 89. 三浦朱水           |
| 10. 裏門            | 50. 今村渡二          | 90. 横川源蔵           |
| 11. 黒門            | 51. 吉田六郎          | 91. 河手闇人           |
| 12. 山崎門           | 52. 天野康文          | 92. 橋本達太郎          |
| 13. 大手門           | 53. 麻原乾三郎         | 93. 松沢辰蔵→松沢勢       |
| 14. 梶御殿(藩主の別邸)    | 54. 弘道館(蕃校)       | 94. 竹花小右衛門         |
| 15. 木俣土佐          | 55. 作事小屋          | 95. 松居喜三郎          |
| 16. 鹿伊織           | 56. 佐和三郎          | 96. 林七郎右エ門→林弥五郎    |
| 17. 増田匡           | 57. 京橋口           | 97. 堀部多三郎          |
| 18. 朝比奈藤右エ門→朝比奈茂己 | 58. 船町口           | 98. 大久保小膳→佐藤省二     |
| 19. 新野大隅(直中10男)   | 59. 長橋口(開かず口)     | 99. 加茂八蔵           |
| 20. 新野大隅(直中10男)   | 60. 竹原宿三郎         | 100. 池田斧介→池田太一郎    |
| 21. 集後様御墨敷(直中の子)  | 61. 清原忠蔵          | 101. 大久保九一郎→大久保孫七郎 |
| 22. 集後様御墨敷(直中の子)  | 62. 舟上藤馬          | 102. 鹿野善次          |
| 23. 長野伊豆          | 63. 清瀬宗寿郎         | 103. 村上十右エ門        |
| 24. 犬塚求之介         | 64. 渡辺勘十郎         | 104. 陶沢健三          |
| 25. 戸塚佐太夫         | 65. 田辺専太          | 105. 笑形惣左エ門        |
| 26. 戸塚佐太夫         | 66. 丸山一太夫         | 106. 石原西右エ門        |
| 27. 長野伊豆          | 67. 曽根惣三郎         | 107. 石原善平          |
| 28. 長野伊豆          | 68. 山根善五右衛門       | 108. 西堀治平          |
| 29. 木下周吉          | 69. 八木原謙二郎        | 109. 大久保姫次         |
| 30. 広瀬美濃          | 70. 八木原能彥         | 110. 三浦九右エ門→三浦角次   |
| 31. 西山内蔵允         | 71. 秋山誠           | 111. 渡辺友次郎         |
| 32. 西郷伊豫          | 72. 間島丹蔵          | 112. 石居平平          |
| 33. 麻原土税助         | 73. 竹岡衛上          | 113. 吉川一穂谷一學       |
| 34. 藤田隼人→藤田つ次     | 74. 間島吉弘          | 114. 石居清蔵          |
| 35. 内藤茂登          | 75. 松居青兵衛         | 115. 萩原八十郎         |
| 36. 奥山忠衛          | 76. 越石小源太         | 116. 大久保修          |
| 37. 横地松二郎         | 77. 三田村静人         | 117. 堀木源五郎         |
| 38. 横地松二郎         | 78. 内藤吉右衛門        | 118. 富田六三郎         |
| 39. 奥山忠衛          | 79. 磯島与惣五郎        | 119. 萩地            |
| 40. 木俣格造          | 80. 松居八郎介         |                    |

(注・矢印を付した名前は、左が修正前の判断できたもの、右は修正後のものである。)

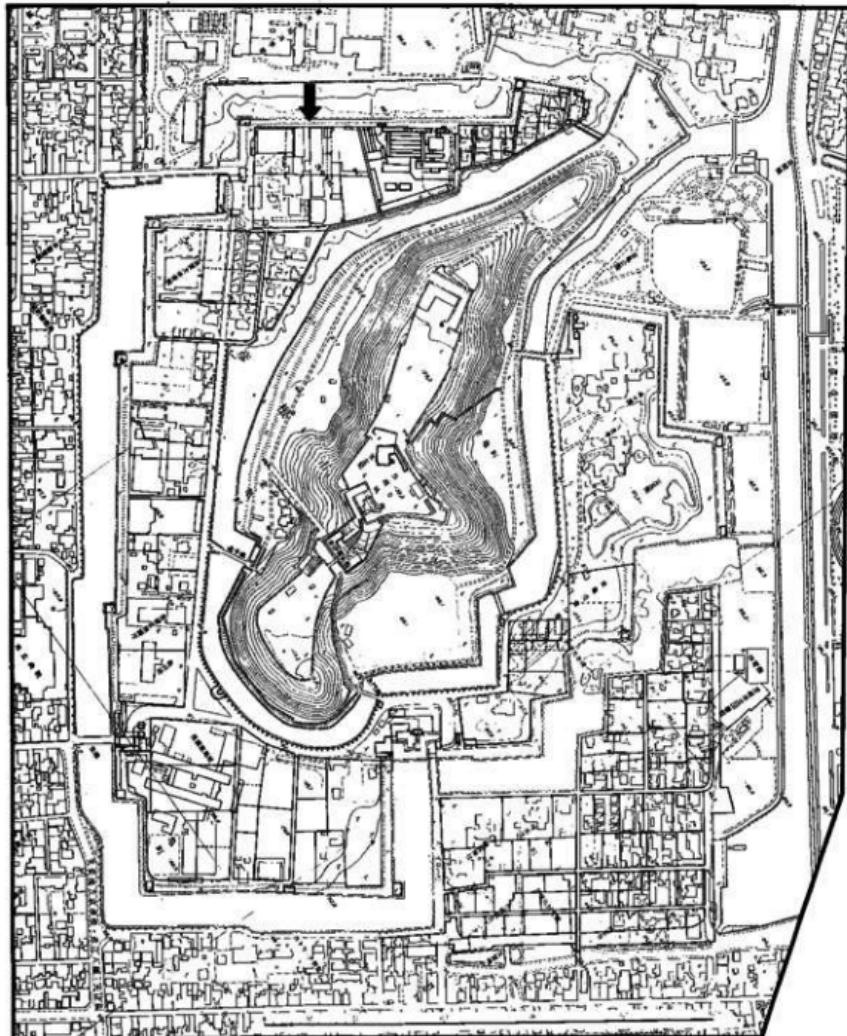


図3. 現況地図に「御城下惣繪図」の屢敷割りを加えた地図

(ただし、絵図が現状に合致しない部分については、若干補正した。)

## II. 歴史的環境

彦根山（城山）は、磯山・大堀山・野田山など周辺の山々と同様、秩父古成層からなる。古くは鈴鹿山地に連続し、その後長く湖中の島であったが、やがて芹川の沖積作用等によってしだいに周辺部が埋まり、彦根城築城前夜には、北東側一帯にいまだ内湖（松原内湖）を残していたものの、他域はおおよそ陸化していたようである。陸化した地には、2・3の村落と広大な水田が広がり、彦根山上の彦根寺に向かって1条の順礼街道が走るモノトーンな風景があった。

この風景は、慶長8（1603）年秋、彦根城の築城と城下町の建設が開始されるとともに、一変した。山上の彦根寺や山下の村落は移転・撤去され、水田の地均化、河川の整理などが大規模に行なわれた。芹川は、現在の河原町より長松院あたりで折れて、彦根山をかすめるように松原内湖へ注いでいたのを、西へ直流させて琵琶湖へと導いた。こうしてできた旧芹川河道及び河口周辺の低湿地は、彦根山の東端（現在の尾末町あたり）にあったとされる尾末山を切り崩し、その土砂によって埋め立てられて、城下町に変貌した。

今回の調査地は、彦根山の西、松原内湖と陸地の接点付近にあたり、築城前の古絵図から、沼沢地状の「江川」が内湖に開口し、山側は「金亀ヶ瀬」と称されていた様がうかがわれる。当地一帯も又、周辺の山を切り崩し、その土砂によって埋め立てられ、城下町に生まれ変わったのであろう。このことは、発掘調査の結果からも予想された。調査のため、深さ50cm余の客土及び搅乱土を剥ぐと、灰褐色粘質土ないし赤褐色粘質土からなる江戸期の造構面が露呈する。両土とも角礫を多く含んだ山土である。これらの、いわゆる埋め立て土砂と考えられる層は比較的薄く、30~40cm程度で、その直下には青灰褐色の幾分グライ化したシルト又は砂質土が広がっている。湧水を伴ない腐植土層が薄く介入するなど、埋め立て以前、当地一帯が内湖縁辺部であったことを物語っていた。

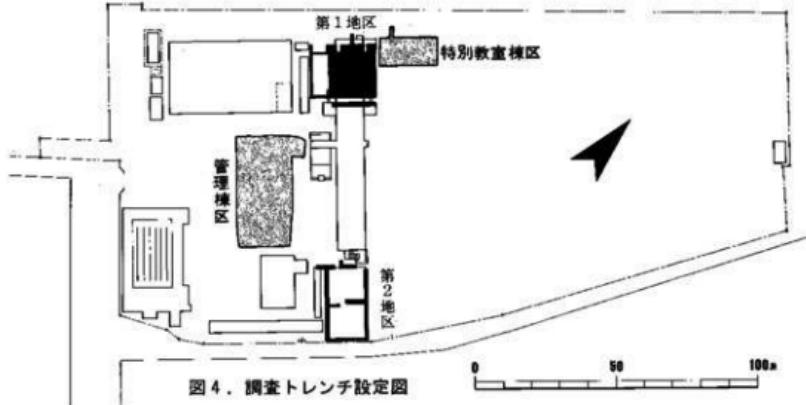


図4. 調査トレンチ設定図

### III. 検出遺構

#### 特別教室棟区

特別教室棟区は、普通教室棟の北に位置し、北西には中堀に面する土塁が築かれ、南東はグランドが広がっている。調査の結果、当区は旧校舎の基礎工事等によって大幅な擾乱を受けていた（破線部分）が、残地の精査の結果、遺構面を2層確認することができた。

上層の遺構面は、表土下の客土・整地土等を40~50cm余掘削した結果、検出することができた。灰褐色粘質土をベースとする。塙（SA01）と考えられるピット列、十字に交わる石組みの雨落ち溝（SD01・SD02）、それに伴うと考えられる石組みの溜め樹状遺構（SK01）、円形土壠（SK02・SK03）などがある。

下層については、上層に遺構の造存しないトレント北コーナー付近を部分的に掘り下げた結果、造構面を確認することができたものである。赤褐色粘質土をベースとする。先のSK01に類する石組み溜め樹状遺構（SK04）などを検出している。以下、詳述することにしよう。

##### ◀上層遺構▶

###### 塙 SA01 (図5)

トレントの長軸方向にはほぼ平行して走るピット列からなる。ピットは小さいもので径0.3m、大きいものでは径0.8mあり、ピット間は1間（1間を6尺5寸つまり1.98mと考える）ないし1.5間を計る。類例が彦根城表御殿跡にあり、表御殿を描いた古絵図との照合から塙の位置と判断される。従って、本例も塙の痕跡であった可能性が高い。塙の倒壊を防ぐため、塙の内側にひかえをおよそ等間隔に添える事が多いが、そのひかえの打ち込み跡がピット列として遺存しているのではないかと予想される。

###### 雨落ち溝 SD01・SD02 (図5)

SD01は塙の基礎SA01に平行し、塙より1m余南東側に造られた石組みの雨落ち溝である。現在、南東側の石列を一部で1段かろうじて残すのみで、他はその掘り方の痕跡を残すにすぎない。溝幅0.3mを測る。SD02はSD01に直交する溝で、SD01同様石組みの雨落ち溝であったと予想されるが、現状ではその直線的な掘り方を残すのみである。SA01を潜り、土塁下を暗渠を通して中堀へ流入させていたのであろう。両溝とも覆土が同じであることから、併存していたものと考えられる。なお、SD01から土塁に至る間約5mは、灰褐色粘土に砂を加えて築き固め、貼り床状に仕上げている。建物外周部であろうか。

###### 溜め樹状遺構 SK01 (図5)

SD01の一部を拡幅し、深く掘り下げた石組みの溜め樹であったと予想される。長さ2.0m、幅0.5mの長方形を呈し、深さ0.5m程度の規模が復元される。大半の石が抜かれて遺存しないが、わずかに遺存する北コーナーは、石積みの上部を板石および平瓦で囲っている。こ

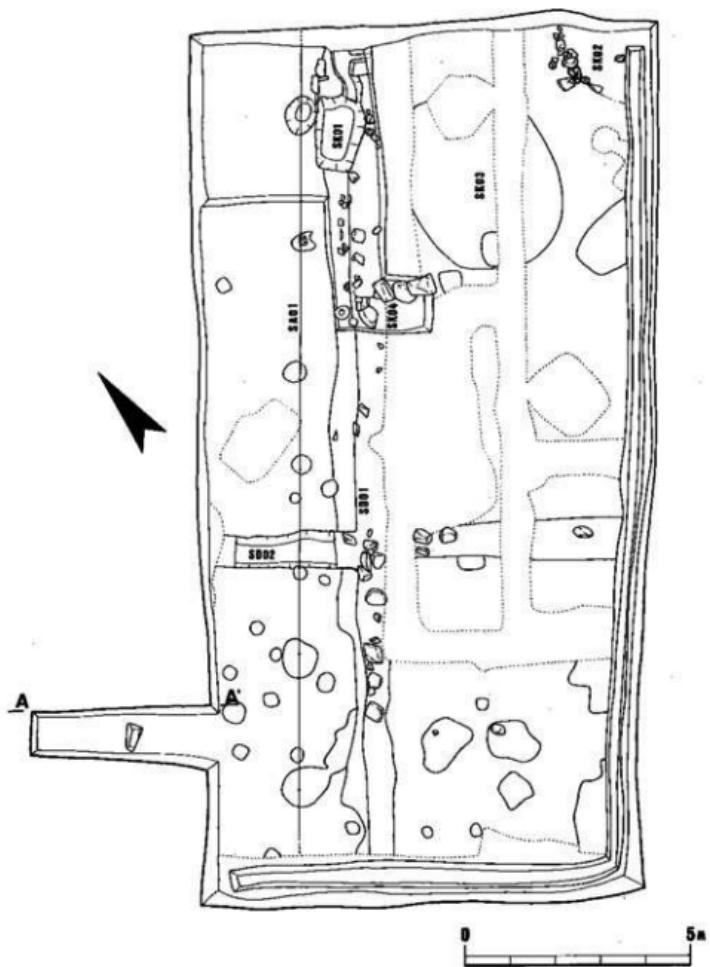


図5. 特別教室棟区構全図

の樹は、SD01を流下してきた泥水を一旦沈殿させ、上水のみオーバーフローさせて再度流していたものと考えられる。覆土は、黒灰褐色粘質土の単純層である。

#### 円形土壙 SK02・SK03(図5)

径3.0ないし4.0m程度の円形を呈する大型の土壙である。断面は浅いレンズ状をなし、黒灰褐色粘質土によって覆われている。SK02は、4分の1程度を検出したにとどまるが、円周にそって角礫をめぐらせている。用途は不明である。

#### その他の遺構(図5)

トレンチの南コーナー付近で、礎石の掘り方と考えられるピット2列を検出した。径1.0m余の不定形な形状を示し、両者間1.5mを計るが、周辺で同様のピットを確認できないため、建て物の規模等については不明である。礎石は遺存せず、わずかに根石の一部が掘り方内に顔を見せていている。

雨落ち溝の北西側で、小ピットを多数検出した。建て物として把握できないが、簡易な小丘状の建て物が堆と相前後して建てられていたのであろう。

その他、土里の状況を確認するため、トレンチの北西側に試掘溝を入れた(図6参照)。その結果、灰褐色粘質土からなるベース上に、⑥灰色砂層、⑦灰褐色粘土層、⑥淡黒灰色粘質土層、⑤黄灰褐色粘質土層が順次層を重ねていた。当初は土砂をたたいて固めた、いわゆる「たたき土居」であったと考えられるが、現状では土砂の崩落により凹状を保っておらず、傾斜も比較的なだらかになっている。なお、明治以降、土里としての機能を失ってからも、④黒灰褐色粘質土層、③淡灰褐色粘質土層、②黒褐色粘質土層等が層を重ねている。④層は瓦や土器等の遺物が混入する整地層であり、②層は草木の腐植により成起した層である。

#### ◀下層遺構▶

#### 溜め枡状遺構 SK04(図5)

上層遺構のSK01に類する施設である。当初上層のSD01を南東へ1m程度平行移動した位置に雨落ち溝が走っていたと考えられ、その一部を拡幅・掘り下げて、石組みの溜め枡にしていたのであろう。石組みの大半は、旧校舎の基礎工事によって破壊・移動し、プランを復

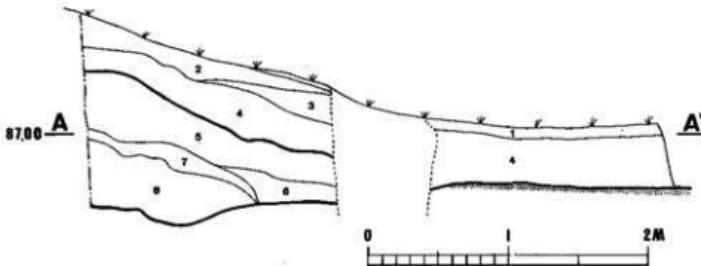


図6. 土壙断面図

元し難いが、わずかに北コーナーのみ旧状を残している。大・小の石を適宜配して方形に組み上げていく様がうかがえる。

#### その他の遺構 (図5)

上層でいう SD 01 より北東側一帯は、やはり灰褐色粘土に砂を加えて築き固め、貼り床状に仕上げている。時期は変わっても、このあたり一帯は建物の外周部であったのだろう。

特別教室棟区の調査の結果、SD 01 の雨落ち溝を境として、その南東側一帯には、遺構として明確なものは検出しなかったが、武家屋敷の奥向きの各建て物が広がっていたものと予想される。一方、北西側は、堀をへだてた外側が、土壁に至るまで、一時的に小屋等の小規模な建て物が建てられることはあっても、基本的に屋外であったと考えられ、地盤が築き固められていた。又、上層の SK 01 、下層の SK 04 は、雨落ち溝に適宜設けられた時期の異なる灌め樹と予想され、当時の泥水処理の方策として見のがせないものであろう。なお、「御城下懸絵図」をみると、当該域は、天野康文邸と庵原乾三郎邸の両屋敷境付近に位置しており、SD 02 の雨落ち溝が、両屋敷を画していた可能性も考えられる。

## 管 理 棟 区

管理棟区は、普通教室棟の南西、体育館の東に位置する。当区も特別教室棟区と同様、旧校舎の基礎あるいはそれ以前の建て物の解体や整地毎に大幅に擾乱を受けており、遺構の残存状態はおしなべて悪い。ただ、精査によって灰褐色粘質土からなる比較的安定した整地層が確認され、以下の遺構が検出された。この整地層に至るまで、地表からおよそ 50~60cm を計る。

トレンチ中央付近および南隅で堀と考えられるピット列 (SA 02・SA 03) を、また、北隅および東隅から建て物 (SB 01 ~ SB 05) を検出した。東隅の建て物 4 棟は、2 棟ずつがそれぞれ方位を異にし、しかも重複している。その他、中央付近でトレンチを T 字に分かつ石組みの雨落ち溝 (SD 03・SD 04) が長く伸び、その北で井戸 (SE 01 ~ SE 03) 、東で便槽 (SL 01) が存在する。土壤として一括した SK 05 ~ SK 07 あるいは大型の埋甕である SP 01 なども、SL 01 と同様に便槽であった可能性が考えられる。西端で検出した SX 04 は、その西に広がっていたと予想される建て物を限る塗喰製の犬走りであろうか。SX 04 の南東側は坪庭であったらしく、塗喰池 SX 01 が確認される。同様に SD 04 の南東側にも SA 02 に面して坪庭が存在したようで、塗喰池 SX 02 が存在する。SX 02 のすぐ南の不定形な土壤 SK 08 も、SX 02 より古い池であった可能性が考えられる。トレンチ北東辺近くで検出した SP 02 、SX 03 はいづれも用途が不明だが、SX 03 については樋水管の分岐点に配された塗喰橋ではないかと予測される。以下、各遺構について詳述しよう。

#### 堀 SA 01・SA 02 (図7)

トレンチの中央付近でSA02、南隅でSA03をそれぞれ検出した。SA02は平行して走る雨落ち溝（SD04）のすぐ南東側に位置し、径0.4m前後的小ピット列からなる。ピット間は3尺～5尺と規則性が余り認められない。特別教室棟区のSA01と同様、塀の倒壊を防ぐため塀の内側に添えられたひかえの打ち込み跡と考えられる。その場合、塀はSD04の南東側の側石上に据えられていたのであろう。

南隅のSA03は、径0.4mと0.5mの大小2類の小ピット列からなる。ピット間は4尺～6尺と規則性を余り認め難い。やはり塀の内側のひかえの打ち込み跡と考えられる。

#### 建て物 SB01～SB05（図7）

トレンチの北隅でSB01、東隅でSB02～SB05をそれぞれ検出した。SB01は径0.7m前後の円形を基調とするピット列からなる。本来、礎石が据えられていたものと考えられるが、調査時には礎石はおろか根石もほとんど遺存せず、わずかに整地層の色調とは異なる暗灰褐色粘質土によって覆われていたピットのみ検出することができた。それから復元すると、この建て物は4ピットを検出した列を南東限とし、南西限はSD03近くまで伸びていたものと考えられる。南西から北東方向の棟が考えられ、桁間は1間（1間を6尺5寸つまり1.98mと考える）、梁間は1.5間の比較的大きな建て物であろう。なお、SB01の床下一帯は黄褐色粘質土が厚さ5cm程度に貼られており、建て物外周の東南側では一部灰褐色粘土に径1cm前後の玉砂を加えて築き固めていた。人が歩く屋外であった可能性が高い。

東南の4棟は、2棟ずつ（SB02・SB03とSB04・SB05）がそれぞれ建て物の方位を異にしており、しかも重複している。SB02・SB03は方位をN-48°Wに保つ建て物である。一点破線で明示（図7参照）した赤褐色の焼土層を切り込んで、礎石を据える掘り方が掘削されている。掘り方内には根石がほとんど遺存せず、先のSB01と同様の暗灰褐色粘質土で覆われている。焼土層は、後述のSB04ないしSB05の建て物を解体焼却あるいは焼失した際の土砂を整地した層位であり、SB02ないしSB03の建て物を築造する際に貼り床状に築き固めて床下にしている。SB02は、北西から南東方向の棟を持つ小規模な建て物と考えられ、桁行1間以上、梁行2間を数える。1間の柱間は6尺5寸である。SB03は棟の方向を確認できないが、礎石の掘り方が小さく、あまり堅固な建て物とは言い難い。柱間は北西から南東方向が6尺5寸、北東から南西方向がおよそ9尺を計る。SB02とSB03は重複しているが、両棟の新旧関係は判別できない。又、両棟は先述のSB01やSA03と方位を一にしており留意される。

SB04・SB05は、方位をN-42°Wに保つ建て物である。厚さ10cm余りの赤褐色の焼土層を削平した段階で検出した。掘り方内には根石がほとんど遺存せず、掘り方上部には焼土の流入が顕著である。解体焼却あるいは焼失と関連する建て物であろう。SB04は棟の方向を確認できず、礎石の掘り方も小さい。柱間は、いづれも6尺5寸を1間とする。SB05も、棟の方向が不明で、やはり礎石の掘り方が小さい。柱間は、北西から南東方向で6尺を1間とし、北東から南西方向は9尺余を1間とする。

#### 雨落ち溝 SD03・SD04（図7・PL.2）

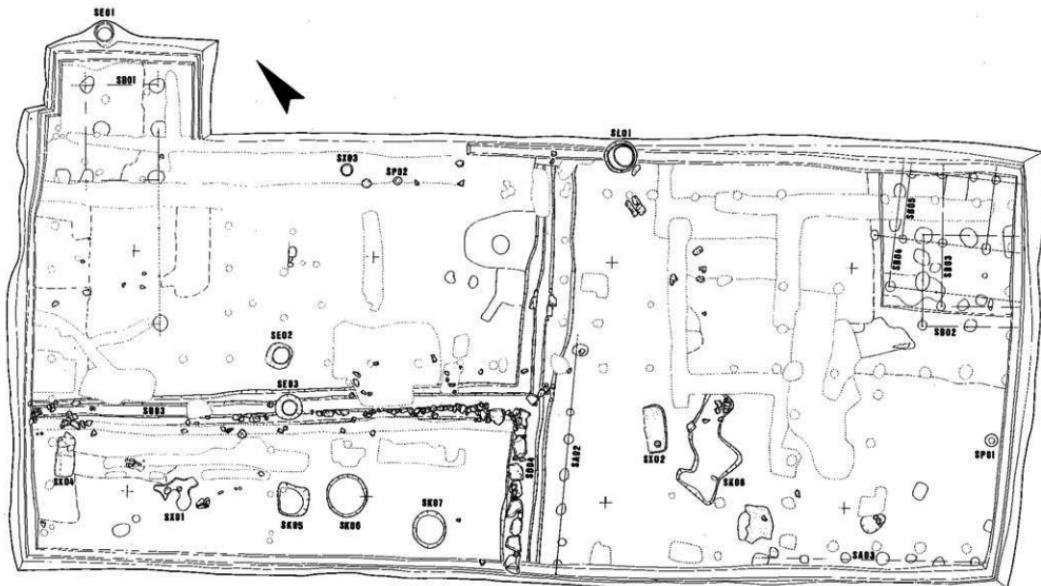


图 7. 管理棟区構造全図

0 10M

トレンチの中央付近で、トレンチをT字に分かつ形で検出した石組みの雨落ち溝である。トレンチの長軸に沿うものをSD03、短軸に沿うものをSD04とそれぞれ称す。SD03は全長21m余、溝幅0.5mを計り、南西側の側石の最下段を残すのみである。遺存する側石は小規模な角礫を主体としており、本来はさらに上段に大型の石が積重ねていたものと予測される。北東側では、石はほとんど遺存せず、その痕跡を残すに過ぎない。底部に底石は確認されず、溝は黒灰褐色粘質土の単純層によって覆われている。覆土中から土器等が比較的豊富に出土している。SD04は全長17m、溝幅0.5mを計り、北西側の側石の一部を残している。側石は比較的大型の1段が確認されている。覆土はSD03と同様の堆積状況を示す。

#### 井戸 SE01～SE03 (図7・8、PL.3・4)

SE01はトレンチ北端に位置する。調査時には、上面をコンクリートで覆って通路に供していたが、近年まで使用していた形跡がうかがわれる。当初は円筒形の漆喰管を順次積み上げて井側としていたようだが、その後、湧水を得るために竹筒を打ち込み、上部0.5m余を残して埋めてコンクリートを塗り、さらに井側をコンクリートで1段付け加えている。コンクリートの井側は、高さ0.6mを計る。付け加えた際、井側が北東方向に0.3m程度ずれている。この新しい井側内から近年の多量の雑器類が出土した。

SE02は、SD03のすぐ北東に位置する。桶を倒立させて、順次積み重ねて井側とするタイプの井戸である。桶は、口径75cm、底径71cm、深さ55cm程度である。本来は桶を幾段も積み重ねた比較的深い井戸であったと考えられるが、しだいに堆積する泥土のために、現況では1段目の桶の下部で4枚の板材を円形に切って泥土上面に蓋をし、板材に1孔を穿って湧水を導く竹筒を打ち込んだ、極めて浅い井戸として再利用を計っている。この点は、先のSE01と良く似ている。井側内は①灰青黒色砂泥からなる投棄層によってほぼ埋まり、底部で使用時のヘドロである②黒褐色泥炭がわずかに確認される。①層内は瓦や陶磁片などが多く混入しており、②層では植物遺体が検出される。③青灰褐色砂質土で充填された掘り方は狭く、桶の大きさにあわせて井戸を掘り進めながら、順次桶を積んでいったものと想される。

SE03は、SD03を切り込んで掘開された井戸である。長さ1m、幅10cm、厚さ1.5cm程度の板を縦に円形に組んで細長い筒状にしたもので、幾段か積み重ねた、いわゆる円形縦板型木組み井戸である。調査で、井筒を3段まで確認している。筒の規模は下段のものほどしだいに小さくなるようで、2段目の井筒の上端径59cm、3段目では54cmを計る。1段目の井筒の下端近くの外側にはタガをはめていた痕跡が認められる。井側内には、①黄灰褐色粘質土層、②灰褐色粘質土層、③青灰褐色泥炭層が順次層を重ねている。いづれも井戸としての機能を失ってからの投棄層と考えられる。井側のほぼ中央には、投棄する際に入れられた息抜き用の竹筒が1本縦に入っている。④背灰褐色砂質土で充填された掘り方は狭く、SE02と同様、井側の大きさにあわせて井戸を掘り進めながら、順次井側を積んでいったものと考えられる。

#### 便槽 SL01 (図7・8、PL.4)

SL01は、トレンチ北東辺の中央付近に位置している。槽は桶を利用する。大型の槽から

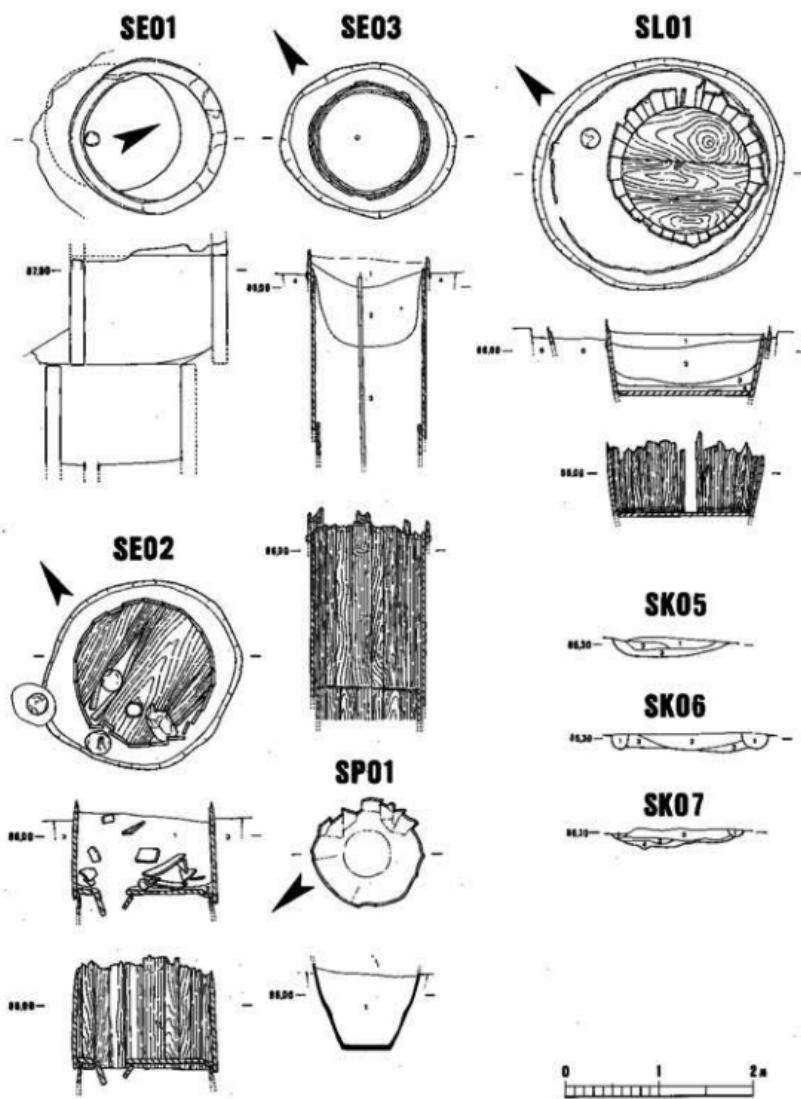


図8. 井戸・便槽等実測図

小型のものへと一度造り変えられており、大型のもので口径114cm、小型のもので口径83cm、底径70cm、現存高38cmを計る。小型の桶の上部外側にはタガが確認され、下縁近くの内側には幅1cm余の横位の削痕が顕著である。後者は、底板を上から挿入する際、入りにくかつたために側板を削ったことに起因する痕跡であろう。小型の桶内には、①青灰褐色粘土、②青灰褐色砂質土、③灰褐色砂質土、④黒紫色泥土が順次層を重ねる。①～③層は便槽としての機能を失った後の投棄層であり、④層は利用時の堆積層で若干の臭気を伴なう。大型の桶の上部は、⑤暗青灰褐色砂質土で覆われ、この桶の掘り方には⑥淡青灰褐色砂質土が充填されている。

#### 土壤 SK05～SK08 (図7・8)

SK05～SK07の3例は、SD03の南に連なって検出された。SK05は隅丸方形を、SK06・SK07はほぼ正円形を呈す浅い掘り込みからなる。SK05は、①黒灰色砂質土層、②灰褐色粘土層、③青灰褐色砂質土層が層を重ねている。いづれの層位も投棄層と考えられる。SK06・SK07には、①黒褐色炭化層、②黒灰色粘土層、③赤褐色粘土層が順次堆積する。①層は、平面的にみると正円形プランの内周をドーナツ状に構成するものである。当初板材が円形に立てられており、それが炭化したものと解される。②層は投棄層、③層は造構の底部を貼り固め、あわせて①層の板材を固定していたものと考えられる。これらのことから、以上の土壤は、本来桶状のものを埋設していたと予想され、その可能性として最も高いのが便槽ということになろう。

SK08は、後述のSX02のすぐ南に位置し、検出レベルからSX02より古いと考えられる不定形な土壤である。東辺には角突が集積し、その西約1m間は径数cmの小さな杭が不規則に連なっている。ここから金箔で楓の葉をあしらった黒漆碗の破片(写真1)が出土している。土壤の底盤には若干粘土を貼った形跡が認められ、小さな池ではなかつたかと考えられる。

#### 埋甕 SP01・SP02 (図7・8, PL.6)

SP01はトレンチの南東辺付近で、又SP02は北東辺付近でそれぞれ検出した埋甕である。両者とも正位置で土中に埋設されていたと予測され、検出段階では脇部下半を残して上部は削平されていた。ただ、SP01では、その破片が四回に散在していたため、接合したところ、ほぼ全容が復元された。その結果、SP01は、直口氣味の口縁部にやや肩の張る脇部の付いた甕であり、口径58cm、肩部最大径69cm、底径22cm、高さ78cmを計る。甕内は青灰黒色粘土で覆われ、甕の下脇部内側には硝酸ア



写真1. SK08出土の漆甕

ンモニウムの被膜が全体に付着している。彦根城下の発掘調査の成果によると、便槽の埋甕にはほとんど羽釜を利用しているが、本例も便槽に供されていた可能性が高い。S P O 2 は、底径15cm余の小規模な甕を上中に埋めたものである。用途は不明である。

#### 漆喰池 SX01・SX02 (図7・9、PL.5・6)

S X 0 1 は、後述する大走り (S X 0 4) の南に位置する三ッ葉状の漆喰池である。全体に遺存状態は不良で、池の底部を残して肩部より上は欠損している。池中の北西に偏して数寄な石を置いて岩島を表現し、中央付近の量深部には平瓦と棟瓦を三角柱状に組んで埋置している。上蓋は約半分が開口し、底部を形成する平瓦の上には円碟が敷かれていた。鑑賞用小魚のための寝床ではないかと考えられる。

S X 0 2 は、雨落ち溝 (S D 0 4) やそれと平行して走る堀 (S A 0 2) などの南東側に位置する漆喰池である。北西側過半を欠損しているが、おそらく隅丸方形を呈していたものと予測される。南隅に偏して甕が1つ埋置されている。甕は口径20cm、底径11cm、高さ27cmを計る。先のS X 0 1 と同様に鑑賞用小魚のための寝床ないしは水草の植込みの用途が考えられる。池の底部は平坦であり、形状とともに、S X 0 1 に比べると比較的シンプルな漆喰池ということができるよう。

#### 漆喰樹 SX03 (図7、PL.6)

径50cm余の、底部をやや丸く収めた円筒形を呈する漆喰製の丸樹である。S P O 2 のすぐ北西で検出した。上部は欠損し、わずかに下半部を遺存しているにすぎない。内面は水垢の沈着が著しく、樹の曲折部に用いられていた樹と予測される。おそらく、樹の上位で孔を穿ってある方向から樋が取り付き、他の方向に必要な角度を取って、別の樋が取り付いていたのであろう。彦根城下の水道は、遠く外堀の元樹（現在の城東小学校裏手付近）から、噴出水圧を利用して

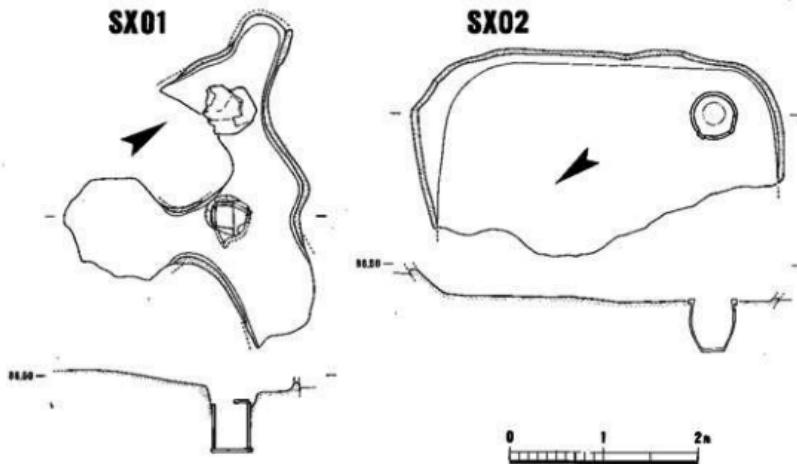


図9. 漆喰池実測図

して樋で導いていたことが、古絵図などから知られる。それによると、樋として石樋・木樋・竹樋そして新しくは瓦樋が存在したようである。ところが、石樋・瓦樋などについては、曲折部や枝別れする箇所に用いられた枠が方形に描かれており、唯一竹樋のみ円形に表現されている。又、今回の検出箇所が扇敷割内にあり、石樋・木樋・瓦樋などのように口径が大きくて多量の上水を送る必要のない支線水系に位置することなどを考慮すると、本例のような漆喰製の丸橋は、おもに竹樋用に製作されたものといえそうである。ちなみに、こうした漆喰製の丸橋は、表御殿跡の発掘調査などでも、泉水や湯殿の多い奥向きの要所で検出されている。

#### 犬走り SX04 (図7、P.L. 6)

トレンチの西隅付近で検出した漆喰造構である。現存長1.9m、幅0.8m、厚さ10cmを計る。この遺構の直下には玉砂が敷かれている。後世の加圧によって多方間に亀裂が入っており、遺存状態は良くない。本来、この遺構の北西に広がっていたと想像される建物の、外周をめぐる漆喰製の犬走りではなかったかと考えられる。それが、この箇所のみ破壊をのがれて、部分的に遺存したのであろう。

管理棟区の調査の結果、SD03とSD04の両雨落ち溝を境として、トレンチを大きく3区画に分つことができる。北側の区画は、北西方向にSB01の建物があり、そのすぐ南東は屋外であろうか土表が築き固められていた。さらに南東方向には、井戸(SE02)や埋甕(SP01)・漆喰池(SX03)などが点在しているが、このあたり一帯の建物の存否あるいはその機能については不明である。トレンチ北端の井戸(SE01)は、SB01端に組み込まれて水屋を形成していた可能性も考えられる。

西側の区画は、北西端で建物の南東を限ると思われる犬走り状の漆喰造構が確認される。その南には漆喰池(SX01)があり、一帯が建物のない坪庭空間であったと予測された。さらに南には、便槽の痕跡ではないかと思われる土壙が3基連なっており、屋外便所ないし南西に伸びる建物の北東辺と考えられる。

南東側の区画は、前2者と溝に付設された塀によって区画されており、東側で小規模な建物が検出されている。3期の建て変え(SB02～SB05)が認められ、その間に1度敷地を実施していた。これらの建て物のすぐ北西および南西側は、それぞれ便槽(SL01・SP01)が確認されるものの、建て物の存否については不明である。ただ、南西端では1条の塀が検出されており、屋敷内を区分する機能を有していたのであろう。一方、この区画の西側には漆喰池(SX02)や池状遺構(SK08)があり、一帯が建物のない坪庭空間として存続したものと考えられる。なお、「御城下惣繪図」をみると、当該域が、北に天野康文、西に吉田六郎、南東に印其寿之介の各屋敷があり、雨落ち溝SD03・SD04の境界とほぼ一致している(図3参照)。ただ、今回検出した雨落ち溝が、絵図に描かれた時期の境界かどうかについては判別できない。

注①、1983年～1984年にかけて、博物館建設に先立ち実施した表御殿跡の全面的な発掘調査である。近刊。

## IV. 出土遺物

### 土器・陶磁器

#### 特別教室棟区

造構内からの出土品には恵まれなかったが、包含層から若干出土しているので紹介することにしよう。

鉢（P01） 浮文で竜をあしらった縁輪の鉢である。直線的に立ち上がる体部に、大きく外反する口縁部が付く。源戸・美濃系か。

擂鉢（P02） 赤褐色に焼締めた無釉の擂鉢である。胎土は良好で、粘土紐巻き上げ成形によると考えられる。器高は11.3cmを計り、擂目は10条で幅2.4cmの櫛状工具を使用する。底部は平底で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部外面に幅広い縁帶を形成している。この縁帶外面に2条、内面に1条の回線があげられる。備前焼か。

#### 管理棟区

SD03を始めSE02・SK06・SX01・SP02の各造構及び包含層から、比較的豊富に出土しているので以下に紹介しよう。

##### SD03出土

焼塩壺の蓋（E01） 円形の粘土板の端部を折り込んだ焼塩壺用の蓋である。上面はヘラで丁寧にならしておらず、内面は布目の圧痕を残している。口径7.5cm、高さ1.8cmを計る。

蓋（P03） 内面にかえりをもつ灰釉系の蓋である。体部外面には、鐵釉等で秋草文を描く。径5.4cm、器高0.8cmを計る小規模なものである。京焼か。

香油壺（P04） 大きくふくらむ肩部に小さな頸部とラッパ状に開く口縁部の付いた香油壺である。肩部にはシダ類の葉文が2ヶ所に描かれ、全体に灰釉を施す。底部には比較的大きな撫高台が付く。口径2.8cm、底径4.9cm、器高8.2cmを計る。

徳利（P05） 口縁を外側に折り曲げて縁帶をつくり、頸部から肩へ向かってなで肩に広がり、胴部でやや張りながら腰部へすぼまる方向にある1升徳利である。外面一部に茶褐色の鐵釉を施し、その後表裏に線刻文字を入れている。文字は「〇〇町」と「かさや」と判読される。又、底部には墨書にて「かさや〇御酒」と書かれている。口径4.6cm、底径9.0cm、器高25.8cmを計る。

瓶（P06） 底部へ向かって緩やかに広がる小型の瓶である。口縁には一端をつまんで注口部を作る。体部に1ヶ所抽象的な文様を配した後、透明釉を塗布する。底部には墨書にて、「為ノチ」と書く。口径2.0cm、底径3.6cm、器高7.8cmを計る。仏花瓶か。

行平の把手（P07） 鐵釉を施した行平の把手部である。把手の上面には草花浮文が配されている。

**鉢（P 0 8）** 体部は直立気味に立ち上がり、口縁端を丸く収めた鉢である。底部は回転ヘラ削りの痕跡を残し、体部外面には7条の凹線を廻らす。その後、体部を6ヶ所で押さえて六角形状に保ち、内外に灰釉を塗る。底部内面には日痕が4ヶ所に認められる。口径15cm程度、器高8.5cm、底径9.4cmを計る。火入れあるいは水指の用途に供されたものか。

**火鉢（P 0 9）** 口縁部を内方へ巻き込む小型の火鉢である。底部は円形の粘土板を貼り付けて高台とする。体部外面に灰釉をかけ、鉄釉等で山水を描いている。器高18.7cmを計る。

**摺鉢（P 1 0）** 茶褐色の鉄釉を施した摺鉢である。胎土中には小砂粒を含む。器壁は薄く、体部は外湾気味に外上方に開く。口縁部は肥厚させて縁帶を形成するが、比較的シャープに外へひねり出している。口縁部内面には1条の凹線がめぐる。摺目は7条で、幅1.8cmの櫛状工具を使用する。信楽焼か。

**染付碗（W 0 1 ~ W 0 3）** W 0 1は、椀形の器形に挽高台の付く染付碗である。体部外面には呉須により花唐草文を、又内面の茶溜りには松葉文を円形に描いている。口径10.5cm、器高5.5cm、高台径3.6cmを計る。

W 0 2は、椀形の器形に挽高台の付く小型の染付碗である。体部外面には呉須によって松梅を2段に配している。口径7.2cm、器高3.6cm、高台径2.9cmを計る。

W 0 3は、半筒形の器形に挽高台の付く小型の染付碗である。体部外面には摺絵手法によつて唐草文を描いている。口径5.2cm、器高3.2cm、高台径3.0cmを計る。

#### S E 0 2 出土

**染付鉢（W 0 4）** 外湾する体部に、逆S字状に内側へ丸め込む感じの口縁が付く染付の鉢である。底部には挽高台が付く。見込みには松梅文を大胆にアレンジし、体部外面には唐草文を横位に配す。口縁端は鉄釉を塗って口紅とする。高台内は一部欠損しているが、「大明成化年製」と読める。口径20.0cm、高台径9.7cm、器高7.8cmを計る。

#### S K 0 6 出土

**燈明皿（E 0 2）** 中世以来の伝統をもつ素焼きの皿、つまりカワラケを転用したシンプルな燈明皿である。口縁部に燈心の燃えた痕跡が黒く残っている。口径12.6cm、底径8.0cm、器高2.5cmを計る。

#### S X 0 1 出土

**蓋（P 1 1・P 1 2）** P 1 1は、中央に高い鈕の付いた灰釉系の蓋である。径10.0cm、器高4.5cmを計る。P 1 2は、内面にかえりをもつ蓋である。鉄釉をリング状に配し、その上に松葉文を描く。径7.8cm、器高2.5cmを計る。

**色絵壺（W 0 5）** 椭形の器形に挽高台の付いた小型の色絵壺である。体部外面には草花文等を描く。口径6.4cm、器高5.1cm、高台径3.2cmを計る。

**蓋（W 0 6）** 内面にかえりをもつ染付磁器製の蓋である。天井部から口縁部へゆるやかなふくらみをもって続き、体部外面に呉須で蛸唐草文を描く。水挽ロクロ成形か。径10.2cm、器高2.3cmを計る。

#### 包含層出土

**向付（P 1 3）** 過半を欠損しているため全容をつかめないが、織部焼の向付が予測される。濃緑の銅縁軸（織部軸）を端部に施し、他域に鉄軸で抽象化された文様を描く。底部には粘土紐をU字に曲げて脚とする。2足が遺存するが、本米は3足か。遺存する1辺は10.6cm 器高4.8 cmを計る。

**鉢（P 1 4）** 黄褐色を呈す黄瀬戸系の大鉢である。外反気味の体部に、外開きの拵高台が付く。口縁部内側には、断面三角形のかえりがめぐる。体部外面には河骨に特有の羽文が刻まれている。底部内面には目痕が確認される。器高15.0cmを計る。

**擂鉢（P 1 5）** 暗赤褐色の胎土を保つ無釉の擂鉢である。胎土中には小砂粒を含む。粘土紐の巻き上げにより成形したものと考えられる。体部は直線的に外上方に開く。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、丸く收める。口縁部外面には明瞭な稜が形成されており、片口が開く。体部内面に竈で1条描の摺目を施している。口縁部付近には窯印が認められる。丹波焼か。

**小皿（W 0 7）** 正方形の4隅を内側へ屈曲させた染付の小皿である。内底面には3種の印文が配されている。印文は、瓢箪印・方印・鼎印の形状を示し、それぞれ内に「子画」「高峯」「天祐」の文字を篆書で刻む。1辺9.0 cm、高さ2.6 cmを計る。

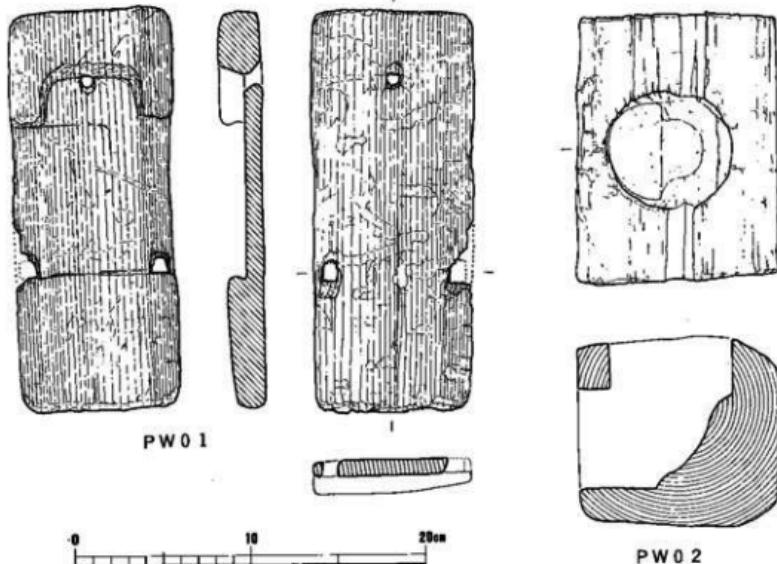


図10. 出土木製品実測図

## 木 製 品

SD 03より庭下駄、SE 02より竹樋駄が各1点出土しているので紹介しよう。

庭下駄（PW 01） 一木造りの下駄で、両齒とも歯として台から独立していない。長さ22.9cm、幅9.2cm、台の厚さ1.0cm、齒の厚さ最大1.5cmを計る。前緒孔は、前齒をコ字状に抉った端部より穿孔する。横緒孔は、後齒に接する。右横緒孔付近が一部欠損しているが、前緒孔を丸く、両横緒孔を四角に穿孔する。齒は良く使用され全体に摩耗しているが、前齒より後齒が、同じく後齒でも右側の摩耗が特に顕著である。

本例のような下駄は、庭下駄又は露地地下駄と通称されたもので、茶室の露地の歩行などに用いられたようである。そのために齒が台から独立せず、接地面積を広くして庭をいためることを極力少なくするように配慮している。ところが、接地面積が広いために活動的ではなく、又、長距離の歩行にも耐えられそうにない。静かにそして比較的短い距離を短時間歩行するための特殊な下駄といえよう。

竹樋駄（PW 02） 竹樋を連結する木製のジョイントつまり駄である。11.9cm×10.8cm、×15.2cmの直方体の隣接する2面に円孔を穿ったものである。円孔は径7.0cm、深さ3.1cmのものと、径5.2cm、深さ4.4cmのものが直角方向に接続し、両者間は弧状に抉り込まれて連なっている。円孔にそれぞれ竹樋を差し込んで、流れを直角方向に変換していたのであろう。なお、本例のように直角方向に円孔が穿たれている場合には、添水つまり蹴踏等で竹筒にたまる水の重みを利用して反転させ快音を楽しむ施設の、竹筒のジョイント部にも使用された可能性が考えられる。

## V. 考察 —— 坪庭の漆喰池について ——

今回の発掘調査によって、漆喰池2例を検出した。こうした漆喰池については、いまだ市外に類例を知らないが、市内では、本例以外にも表御殿跡の発掘調査によって5例、現存する武家屋敷内で1例を知る。いづれも、江戸時代の所産である。「坪庭」に造られており、本例の漆喰池もその位置関係などから坪庭に造られたと考えるのが妥当と思われる。以下、坪庭に造られた漆喰池について紹介することにしたいが、その前に坪庭について歴史的にふりかえる事から始めよう。

さて、坪庭の「坪」は、「壇」または「局」などとも書かれ、いづれも仕切られたとか、開まれた空間を意味する。したがって、坪庭とは、建て物と建て物との間、または建て物と堀などにとり囲まれた狭い空間に造られた庭のことを言う。

坪庭が造られるようになったのは比較的古く、平安時代頃までさかのぼるようである。当時、平安京を中心とする貴族の邸宅として、寝殿造りの建て物が建てられたが、寝殿造りでは、寝殿といいくつかの対屋が左右・前後に並び、そのおののおのを渡廊でつないだため、建て物間に小さな空間ができた。これらの空間を利用して、坪庭が生まれたようである。ただ、寝殿造りにともなう坪庭では、坪庭の他に本庭として大規模な池泉をもつ庭園（寝殿造り系庭園）が寝殿の前に広がっている。だから坪庭は、おもに奥向きの建て物間に、住人が座臥して楽しむ小さな庭として造られた。庭の植栽も本庭と比べるとおおらかで、四季の草木を主体とするものであつたようである。例えば、平安京内裏では、后妃などが住んだ後宮を中心に坪（壇）庭が幾つか知られ、藤・梅・梨・桐など草木主体の小さな庭であったようである。それは、当初、それぞれの代表的な草木名を冠して「藤壇」「梅壇」「梨壇」「桐壇」と称されていたと考えられるが、いつしか、それらの坪（壇）庭がある建物の名を指すようになり、後宮の飛香舎は藤壇、凝花舎は梅壇、昭陽舎は梨壇、淑景舎は桐壇などと通称されるようになった。それがさらに転じて、それらの建て物を与えられている后妃などを指すに至った事は、「源氏物語」等平安文学を通じて知られるところでもある。

時は流れ、貴族から武士へと支配形態が変化し、それにともない寝殿造りから書院造りへと建築様式が大きく変わっても、坪庭そのものは、奥向きの建て物間を利用して、住人が座臥して楽しむ草木主体の庭としての命脈を保った。書院造りにおいても、各建て物が雁行状ないしは前後左右に並ぶため、小さな建て物空間が寝殿造りと同様に生じたことにも起因しよう。同時に、坪庭を造る習慣は、中・上級武家屋敷や富裕な町屋へもしだいに普及していった。

以上、坪庭を歴史的に振り返ってみたが、つづいて坪庭内にしつらえた漆喰製の池の類例を順次紹介しよう。冒頭で述べたとおり、いづれも彦根市内で検出又は確認した江戸時代の作例である。

### 西中学校校内武家屋敷跡例

まず最初に、今回の調査で検出した2例についてまとめるところから始めよう。

### E X. 1 (図9・SX01)

本報告でSX01と称している漆喰池である。「御城下懸絵図」では、吉田六郎の住んだ上級武家屋敷の東辺部に位置していたと考えられ、石組みの雨落ち溝（おそらくはその横を平行して走る堀が存在していたと考えられる）や建て物によって囲まれた坪庭空間の存在が予期された。そこに漆喰池（SX01）が検出されている。SX01は、平面が三ツ葉状、強いて言えば草書体の心字形を呈している。池中には、やや北西に偏るように岩島が配され、中央の最深部には、平瓦と棟瓦を三角柱状にたくみに組んで埋設している。上辺の約半分に上蓋を架けており、底部上には玉石が敷かれていた。金魚など鑑賞用小魚のための寝床ではなかったかと考えられる。

### E X. 2 (図9・SX02)

本報告でSX02と称している漆喰池である。「御城下懸絵図」では、2代藩主井伊直孝の母の出である印具家の印具寿之介の屋敷に位置していたと考えられる。石組みの雨落ち溝とそれに付随し平行して走る堀や建て物によって囲まれた坪庭空間に、SX02は存在している。SX02の平面形は隅丸方形で池底も全体に平坦な造りをなしており、SX01と比べるとシンプルである点が留意される。池の南隅に偏して埋甕が1つ確認される。

こうした甕を埋め込む要因として、E X. 1のように金魚など鑑賞用小魚のための寝床と考えられる他、水草の植込みの用途も考えられる。両者とも、その機能を發揮するには、水面下0.3 m程度が最良のようであり、本例や次のE X. 3など水面下のレベルが復元される例は、概ねこの数値に齟齬しない。ただ、E X. 1の瓦組みと同一の機能を有していたと考えると、鑑賞用小魚のための寝床であった可能性が高い。

### 表御殿跡例

つづいて、彦根城内表御殿跡から検出された漆喰池を紹介することにしよう。表御殿は、江戸時代に彦根藩が政務をとり、あわせて藩主などが日常生活を営む、書院造りの建て物である。この御殿には、御座之御間や御茶所などに面して、大規模な池泉の他、築山・数寄屋・待合などによって構成される庭園が広がっている。そして、奥向きの建て物間を中心に、幾つもの坪庭が造られている。当時の表御殿の各坪庭を描いた絵図をみると、やはり四季の草木を主体としたものである。そして、発掘調査の結果、坪庭の内3ヶ所5例の漆喰池が検出された。

### E X. 3 (図11のA、図12)

藩主などがくつろぐ奥向きの御座間や御茶所などに面した坪庭にある。漆喰池は、長軸3.7 m、短軸最大1.6 m、最深部0.4 mの瓢箪形を呈し、瓢箪のくびれ付近に漆喰で円形の中島2島を造り出している。最も深くなる箇所には甕が埋め込まれている。E X. 2に同じく金魚など鑑賞用小魚のための寝床、あるいは水草の植込みの用途が考えられる。

漆喰池の壁面には、図示したように入・排水のための円孔が各1穴ずつ穿たれている。円孔は径7 cm程度を計り、竹製の管が挿入されていたものと予測される。水は、遠く油掛口御門近くの外堀（現在の城東小学校裏彦根警察署武道場付近）にある元樹から、元樹の噴出水圧を利用し桶で導いていたことが、古絵図などより知られる。それによると、道路下を走る幹線系の

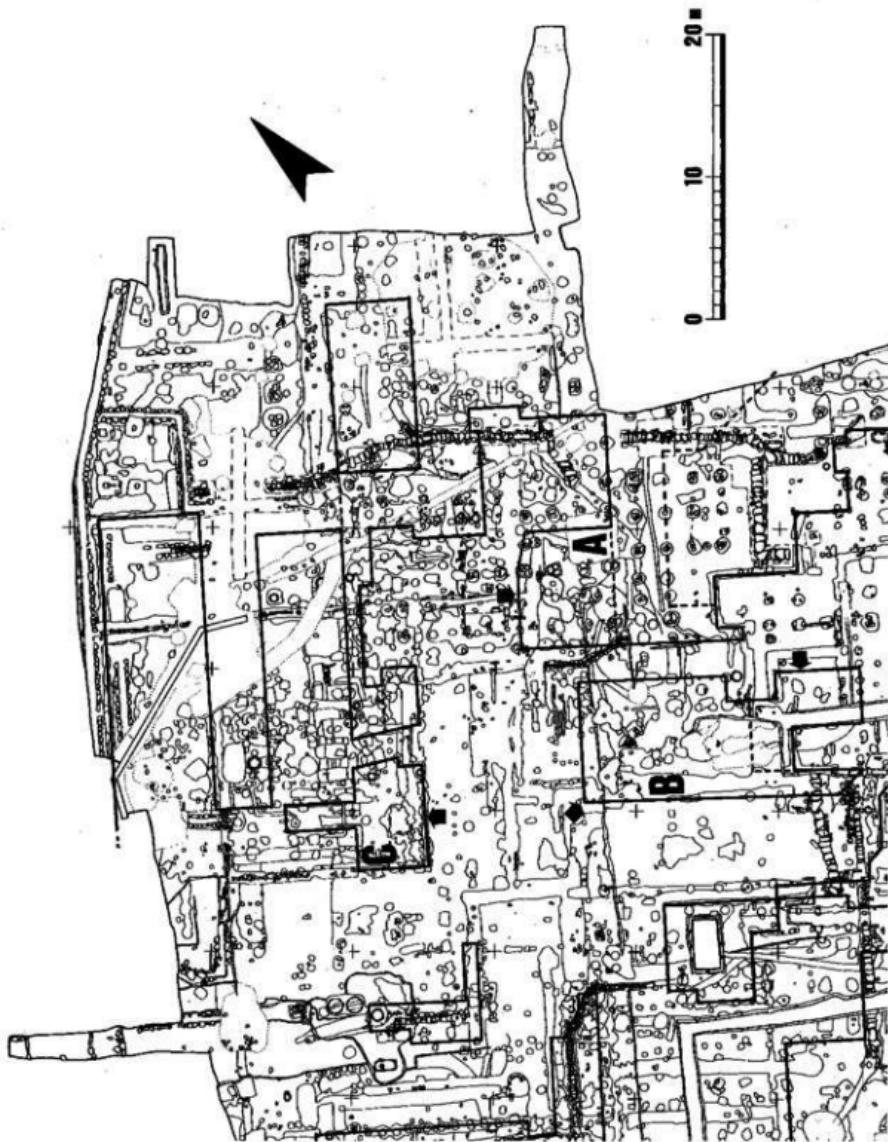


図11. 愛根城表御殿跡（部分）坪庭位置図

（矢印は坪庭の主たる観点を示す）

樋としては石樋・木樋・竹樋そして新しく瓦樋が知られ、各屢敷へ分水された支線系の樋は、径の小さい竹樋などが主体を占めたようである。竹樋の場合、本報告のSX03のような円形の漆喰池やPW02の木製駒を経て屋敷内に適宜細分水され、その一条が本例の漆喰池に送水されていたものと予想される。

なお、坪庭を描いた古絵図をみると、桜や桃の木などは植えられているが、池は表現されていない。漆喰池の存在しない時期に描かれたものであろうか。

#### E X. 4 (図11のB、図13)

奥向きの御客座敷や高御廊下に挟まれた坪庭内に位置する。小規模な2基の漆喰池を対称として、その南東に比較的大型の漆喰池が存在している。小規模な2基は、E X. 1に似た三ツ葉状の平面形を呈している。両者とも最も深くなる中央付近に甃を埋め込んでいる。やはり、鑑賞用小魚のための寝床ないしは水草の植込みの用途に供されていたのであろう。南東方向の漆喰池は、後世の搅乱が著しくて全体の形状を把握しにくいが、細長くて底部の平坦な比較的シンプルな造りであったと予想される。

これら3基の漆喰池は、入排水路によって相互に複雑につながっている(図13の矢印参照)。まず、北東方向から導かれてきた水は、小規模な2基の漆喰池の内北東側の池の直前で2方向に分水される。そして、一方は北東側の小池に、他方は南東の大池にそれぞれ流れ込む。この水路は、断面観察において円形の管を埋設していたことが判明しており、おそらく竹樋が施設されていたのであろう。水路内には粘土塊が部分的に残っており、竹樋に粘土を巻いて漏水を

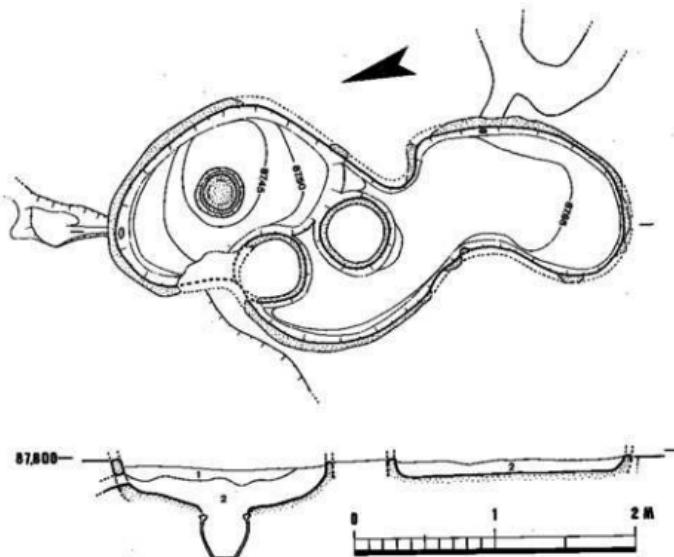


図12. E X. 3 漆喰池実測図

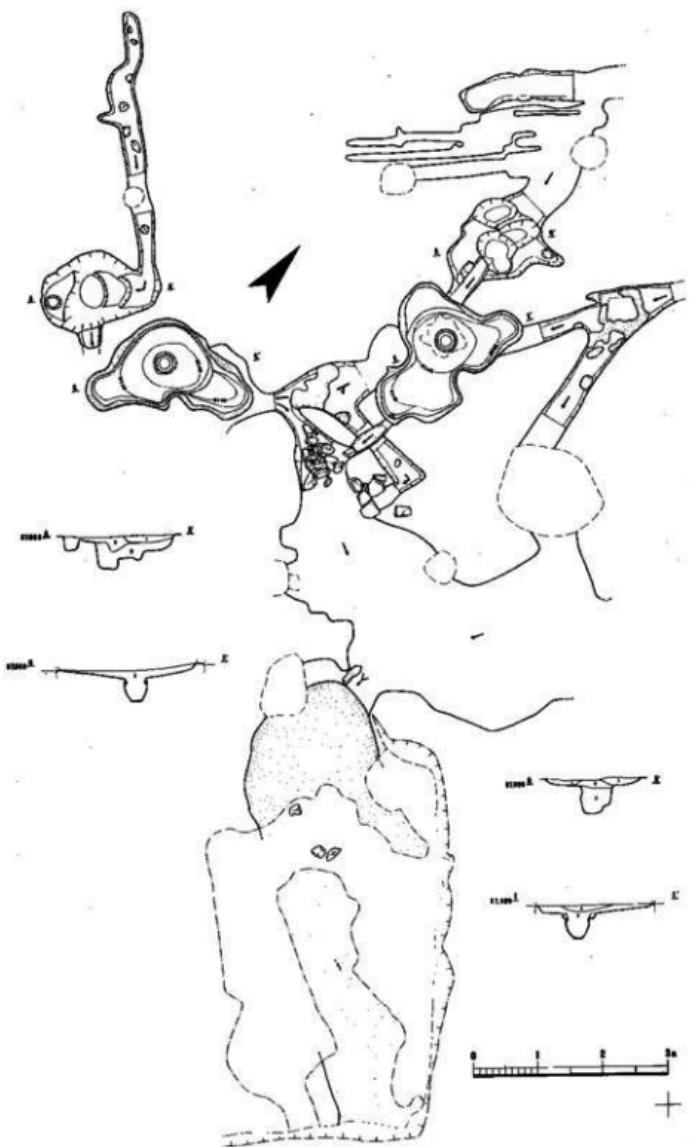


图13. EX. 4 漆油池实测图

防いでいたものと予想される。分水点には、粘土塊が30~40cm程度の方形にめぐっており、木製の駒によって分水していたと考えられた。北東側の小池に入った水は、場所の異なる2孔から排水されていたようである。その1孔は現存しており、孔を出て曲折しながら南東の大池に向かう。孔を出た当初は竹樋であったと予想されるが、途中から多量の角礫に包まれており、石組み暗渠ないしは築敷きのめくら暗渠に変わったとも考えられる。一方、他の孔より排水された水は、途中で木製駒様のもので分水されて、北西側の小池と南東の大池へ向かう。北西の小池へは竹樋で、南東の大池へは竹樋から石組み暗渠又は築敷きのめくら暗渠に変換した可能性がある。北西側の小池へ入った水は、再び隣接する排水口によって外へ流出し、南東の大池へ向かう。やはり、途中で竹樋から石組み暗渠又は築敷きのめくら暗渠風の施設に変換したようである。多方向から南東の大池へ向かった水は、しだいに集水され、終に1条にまとめられて大池に入っている。以上、3基の入排水路について述べたが、分水のなされたが過度に複雑であり、ある段階で一部流路を変えを行なった可能性も考えられる。

なお、これらの竹樋を主体とする導水法とは別に、雨水を使って補助給水を行なっていたのではないかと思われる遺構が、小規模な2基の池にそれぞれ付設されている。両遺構とも良く似た形態を保っており、同様の機能がうかがえる。まず、御客座敷などの建物下を、めくら暗渠を伝って流下してきた雨水は、各池の直前で深さ50cm余の土壙に一度貯えられる。この土壙は、現況では素掘りのものだが、かつては甕等保水性の良い大型容器を埋設していた可能性がある。土壙で沈殿濾過された上水は、オーバーフロー気味に両池にそれぞれ流入していたようである。

当坪庭を描いた古絵図には、梅や草花などが植えられているものの、池が表現されていない。E X. 3と同様、漆喰池の存在しない時期に描かれたものであろうか。

E X. 5 (図11のC、図14)

奥向きの御客座敷の棟と局の棟に接まれ、両棟を結ぶ廊下などによって画された坪庭内に位置している。全体に遺存状態が不良であるため、形状を把握し難い。最も深くなる中央付近に甕を1つ

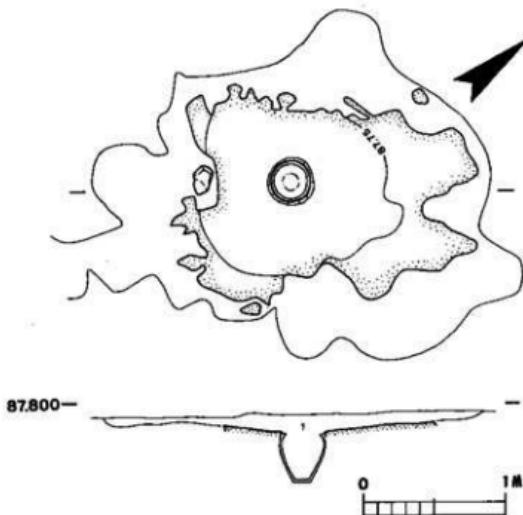


図14. EX. 5 漆喰池実測図

埋め込んでいる。これまで述べてきたと同様の用途が考えられよう。入排水路についても明らかでないが、わずかに北東及び南西方向に溝状のよごれが認められることから、いづれかが入水路、他が排水路であった可能性が考えられる。

坪庭の古絵図をみると、この坪庭のみ池が描かれている。ただ、それが漆喰池であるかどうかについては確定できない。古絵図の池には、池の周囲に景石が6個めぐらしており、池上のあつらえの棚には、藤が蔓をからませている様が知られる。



写真2. 市内現存の武家屋敷内坪庭漆喰池

#### 市内現存の武家屋敷例

##### E X. 6 (写真2)

最後に、市内に現存する武家屋敷で確認した坪庭内の漆喰池について紹介することにしよう。この武家屋敷は、第3郭の中堀に面した位置を占め、石高350石の中級武家屋敷である。屋敷内の2ヶ所に坪庭が現存しているが、漆喰池は門を入ってすぐ右側の表向きの坪庭内にある。壇や座敷・雪題などによって画された小さな坪庭である。中堀側に面して低い築山が築かれており、築山の中腹に鏡石を据えた枯滝口がある。枯滝口から離れ座敷に向かって作られた玉砂利による流れは、ほどなく池泉に入る。現在、池泉に水はないが、かつては満々と水をたたえていたものと考えられ、水漏れを防ぐように池底から護岸の石組みに至るまで漆喰が塗り込められていた。しかも、最も深い箇所には写真のような漆喰製の枠が作られている。30×40cm、深さ40cm程度を計る。これまで見てきた瓦組みや甃と同様の機能が予測され、金魚等鑑賞用小魚の寝床ないしは水草の植込みの用途が想起されよう。なお、この坪庭は通路に変わったため現存しない。

以上、彦根市内で確認した6ヶ所の坪庭内8例の漆喰池について紹介した。これらの漆喰池をみると、幾つかの共有する要素が見い出せそうである。その1つは、EX. 1やEX. 3で検出した石製・漆喰製の池中にしつらえられた中島である。又、遺存状態が不良なため一部でしか検出していないものの、竹柵によって導水する入排水路がある。そして何よりも池の最も深くなる箇所に埋め込まれた、EX. 1の瓦組み、EX. 2～EX. 5の甃、EX. 6の漆喰樹が存在した。今後、漆喰池の発掘・確認例が増加するとともに、類例も増すものと予測される。ただ、前2者つまり中島や入排水路については、規模を拡大したものが本庭にも存在す

るのに対し、後者は坪庭漆喰池に普遍的に存在したにもかかわらず、本庭には余り見ることのできないものである。本庭が格式を重んじる大庭園であるのに対し、坪庭はそのことに余り左右されない、むしろ日常生活の中で住人が座敷して楽しむことに主眼の置かれた小さな庭であった。後者が、金魚などの小魚あるいは水草を鑑賞し楽しむための工夫であることを想起すると、坪庭に特徴的な要素ということができるかもしれない。

最後に、漆喰池の素材をなす漆喰について若干ふれておこう。漆喰は、石灰に砂や粘土そしてにがり液を加えて捏ねたものである。例えば、表御殿跡能舞台下で検出した漆喰製の共鳴装置（槽）について、奈良国立文化財研究所保存化学室室長沢田正昭氏に漆喰の成分分析をお願いしたところ、山砂・砂利・石灰をおよそ5：3：2の比率で混合し、そこへにがり液を加えたものであるという結果を頂戴している。実際の復元作業では、漆喰を塗り足しては叩き締める作業を幾度か繰り返した後、仕上げとして一際念入りに叩く。そのことによって荒い成分はしだいに沈着し、細い粒子のものや水分が浮上してくる。その頃合いを見計って、コテで丁寧になで上げると、あたかも白壁のごとき仕上がり具合になるようである。

こうした漆喰製の造構は、彦根市内江戸期の発掘調査によって数多く知られる。種別ごとに列挙すると、まず、水回りの細工として台所や玄関、便所、茶室の水屋、湯殿の各床などいわゆるタタキと称される箇所、それに縁下や犬走りなどがあり、入排水に関連するものとして、樋の枠や多様な排水管がある。石垣の間隙を埋めるために漆喰を使った例もある。又、先述の能舞台下の共鳴装置（槽）や屋外の防火用水槽、井戸の井筒があり、庭園に関連するものとしては、今回紹介した池の他、池に至る造水の底、露地、柴垣の基礎部分にも使用されている。中には、例えば茶室の縁下など、漆喰に赤色顔料（ベンガラ）を加えて奇てらつてもいる。このようにみると、当時、漆喰は現代のコンクリートにも似た使用頻度にあったことが窺い知れよう。

## 付 章

### 1.はじめに

彦根城の古図によれば、その内曲輪の武家屋敷は実に詳しく記されているが、その内容は屋敷の区画であって、建物配置に関する記録はない。又それだけに当時の武家社会の生活様式は不明のまま今日に至っている。

然るに今回、市立西中学校校舎増築に伴う事前発掘調査が市教育委員会の手によって進められ、県教育委員会文化財保護課の指導の下に発掘調査団が組織され、昭和54年9月5日より開始、現場での発掘調査は約1ヶ月を要した。その間、当時の建物造構及びそれに付随する建物の基礎並に、遺物の出土を見たが、何分にも発掘調査対象区域は、元体育館が建てられていた所で、当時の遺構の大半は殆ど破壊されており残念ながら当時の武家屋敷の実態を確認することが出来なかった。ともあれ、この調査を機会にして今後、彦根城及び市内において種々の開発、原形改造等の工事に先立つて調査が行われることの先駆になり得たことの意義は深い。

今回の調査にあたって、県・市両当局並に発掘調査に従事された関係者、地元の方々に対し感謝の意を表する次第である。

(発掘調査団長 江南 洋)

### 2. 調査の経過

今回の調査は旧校舎老朽化に伴なう新校舎の増築等によるもので、特別史跡彦根城跡の現状変更にかかる事前調査であった。このため調査は建築設計計画に基き、必要個所のみ一部はトレンチ、一部は面的に実施した。設計によると、既建築の新校舎の北（第1地区）は増築計画であったため面的に調査を実施した。一方、既新校舎の南側の第2地区については、付属建物の建築予定であったため、布基礎部分のみ日字状にトレンチを設けた。

なお、調査に際しては、時間的制約と人的制約から、市教育委員会の総務課、社会教育課の全面的な協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

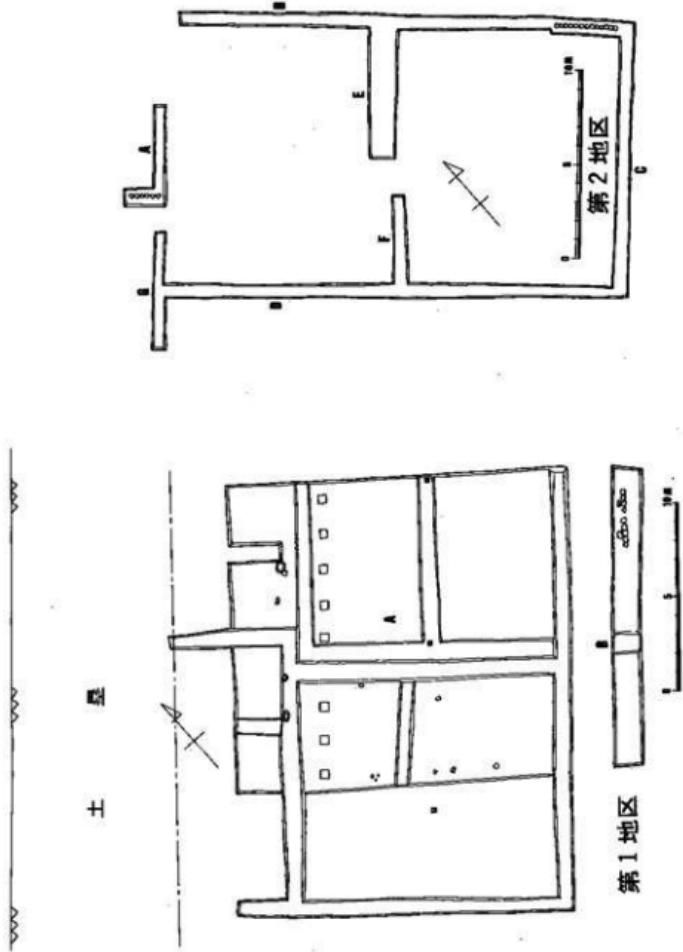
### 3. 遺構

（第1地区）

面的に調査を実施したA区については、旧校舎の跡地であり上層は攪乱が激しかった。特に建築廃材が多く、一部焼土等も含まれていた。

攪乱層の除去後、旧整地層と思われる部分を検出し、精査の結果、束柱礎石または根石と思える刺石8ヶ所と、抜取穴のような径0.5m前後の浅い皿状ピットが3ヶ所確認できた。礎石列と皿状ピット列は、いずれもN-40°W近くの方位を持つが、若干振度が異なり、別棟の可能性が強い。礎石はおおむね20cm角で、5~7cmの厚さをもつ火成岩質であり、柱間寸法は略東西方向が3.25mを、略南北方向は2.0mを公約数に持つ割り付けで建てられていたようである。ピット列についても、略南北方向で2m×5間分となっていた。なお、この柱列は、中層

図15. 付帯園地造林全図



に面する土壁の法尻からは6mの距離を持って平行関係にあった。

A区での遺構は以上の東柱礎石または根石および抜取穴と思えるもの以外は検出できなかつたため、中央に補足トレンチを設け、さらに下層の確認を実施したところ、下層は種々の土砂による荒いレンズ状堆積となり、盛土造成であることが確認できた。また、さらに下層は浜砂層が続き湧水が認められた。

次に旧校舎と新校舎間で旧地表の確認を目的に設けたBトレンチでは、側溝痕と思える横1段積みの石列を延長3.2m分検出できた。用材は花崗岩の割石で1辺30cm、高さ20cm前後の三角柱状のものの1面を削り、内堀側に面を持たせて並べられていた。ただ遺存状態では横1段であるが、一部に裏込めらしき石があることから、さらに上段があったと考えられる。この場合、現石列の天端でも、Aトレンチで検出した東柱礎石とは30cm以上のレベル差を持ち高いことから、あるいは屋敷地の外郭を巡る、腰に石積みを施した堀の地覆列かとも考えられた。

#### (第2地区)

当該区は、先にも記したように設計図に合わせて布基礎部分のみの調査を実施した。ここでは、AトレンチとBトレンチで、それぞれ側溝痕の石列を検出した他は、Dトレンチで花崗岩の割り石を2個検出したのみである。

Aトレンチの石列は、第1地区Bトレンチと同様の用材で略東西方向のものであり、北側に面を持ち、延長1.6m分が検出された。特に石列の前面側は泥が多く、棟瓦が集中していたことから、対岸側の石列は検出できなかったが、側溝の側石と考えられた。

次にBトレンチでの石列は、Aトレンチと同様の方位を持ち、延長3.4m分が検出された。ただこの石列は、既検出の石列とは様相を異にし、平面的に面を持っており、側溝の底石列と考えられた。現列の南端からさらに南へ4mで内堀に面した道路敷に至ることから、屋敷内より中堀側への排水機能を有していたと考えられる。

Dトレンチで検出された2個の石材は東石に適した石材であったが、その検出状況から判断すると原位置を有していないため、何ら判断することはできなかった。

### 4. 遺物

今回の調査地では、大部分の上層が搅乱層と現中学校建設時の整地層で、遺物の主たるものには棟瓦片であった。また、陶磁器類としては伊万里瓶子片や清水焼の碗等があったのみで、他は明治以降のものであった。

### 5.まとめ

今回の調査地は、彦根城の中堀と内堀に挟まれた内曲輪部分の一画で、付近は井伊藤の重臣屋敷街であり、城中でもある。しかし、屋敷街であると云うことは判明しているものの、それ以上のこと、例えば各屋敷内の具体的な建物配置等については、ほとんど具体的な資料はなく、唯一、享保3(1718)年の印具氏へ井伊直興の辰姫が嫁した際に増改築した平面図があるのみで、実態は明らかでなかった。

今回の調査は、このような現実の中で、若干なりとも資料を集積せんがためにも実施したものである。幕末頃、調査の第1地区には天野康文が、第2地区には酒井右膳が居していたことが明らかであるが、今回の調査結果から見て、いづれの石列も屋敷内での排水溝にかかわるもののみと考えられる。

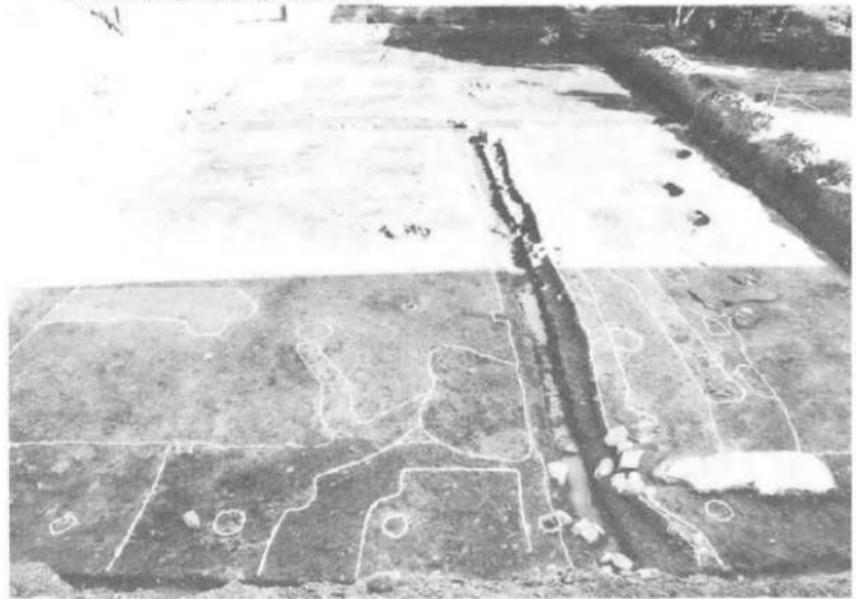
最後に、今回の調査での石列の遺存状況は、若干不自然な状況にあった。つまり側溝としても対岸側の石列ではなく、建物の地覆や、縁石としても前後の距離がないことである。このことは、解体撤去に際して意識的に部分を残した可能性もある。この様な例は、まったく時代・場所を異にするが、難波宮跡でも見られ、暗渠の一部、基壇端等が残されていた。何か共通した意識の中で残されたようにも思える。

(近藤 滌)

# 図 版



1. 特別教室棟区遺構全景（南西より）

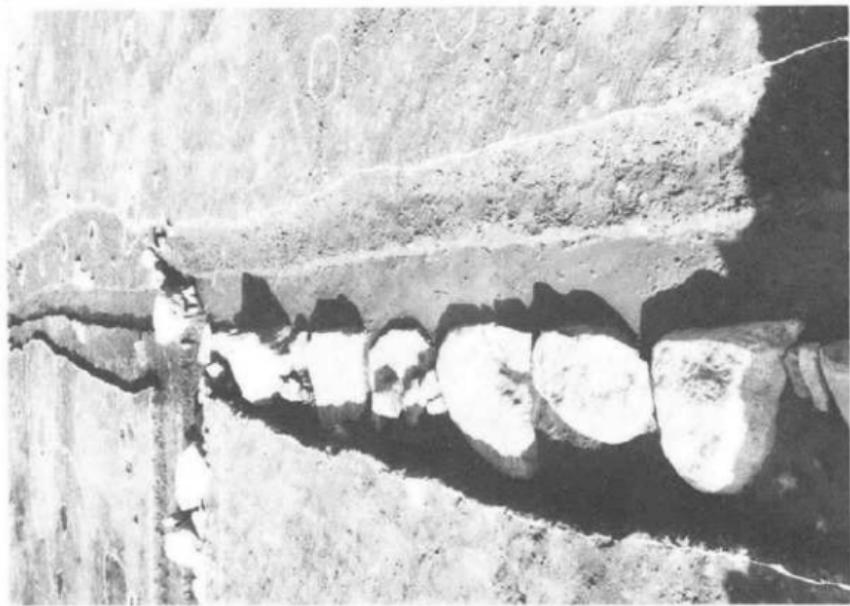


2. 管理棟区遺構全景（北西より）

PL. 2



1. 田落ち灘・SD03 検出状況 (南東より)



2. 田落ち灘・SD04 検出状況 (南西より)



1. 井戸・SEO 1 検出状況（北東より）

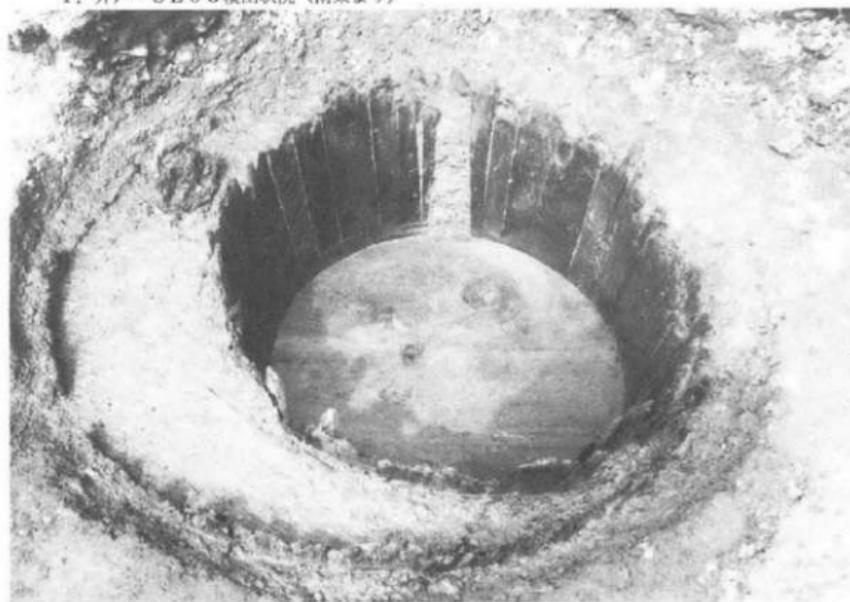


2. 井戸・SEO 2 検出状況（北東より）

PL. 4



1. 井戸・S E 0 3 検出状況（南東より）



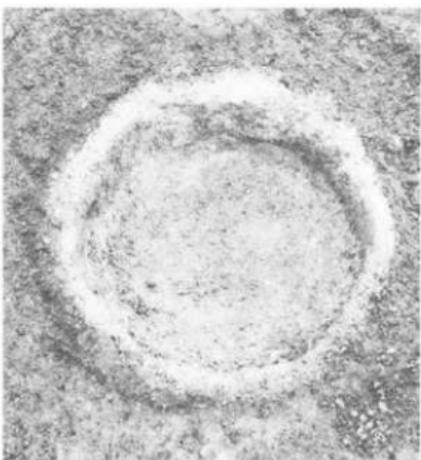
2. 便槽・S L 0 1 検出状況（南西より）



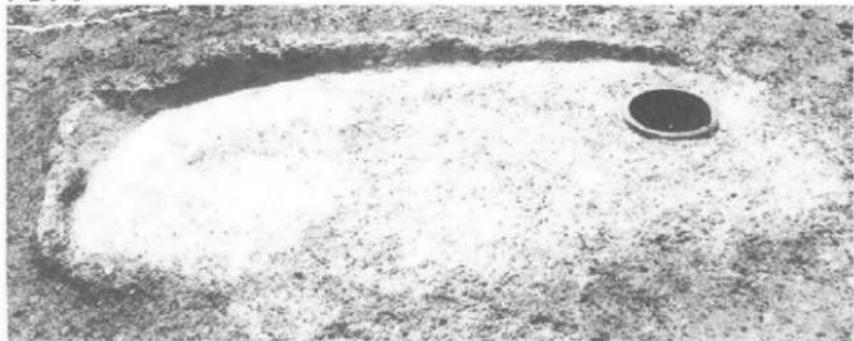
1. 漆喰池・SX 01 検出状況（南西より）



2. 漆喰池・SX 01 内鑑賞用小魚の寝床



3. 漆喰器・SX 03 検出状況（北東より）



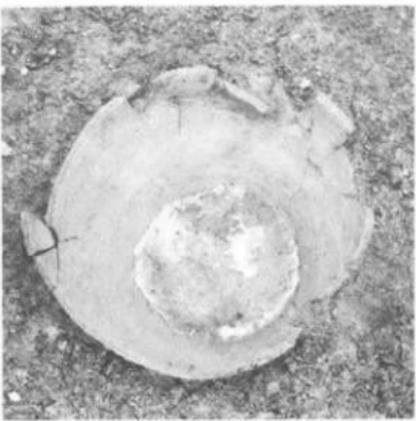
1. 漆喰池・SX02検出状況（北西より）



2. 犬走り・SX04検出状況（南東より）



3. 埋甕・SP01検出状況（北西より）



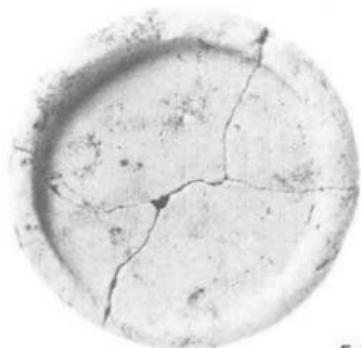
4. 埋甕・SP02検出状況（北東より）



P 01



P 02



E 01



P 03



P 04

PL. 8



P 06



P 05



P 10



P 07



P 0 8



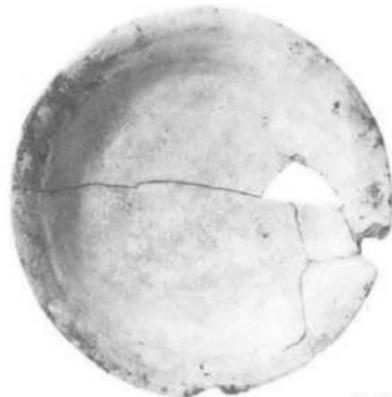
W 0 1



P 0 9



W 0 2



E 0 2



W 0 3

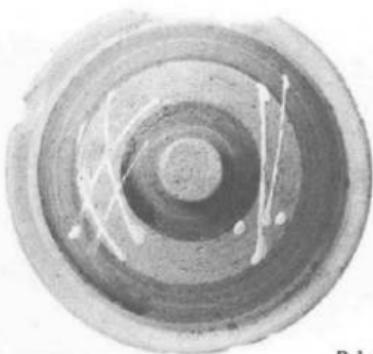


W 0 5

P L . 1 0



P 1 1



P 1 2



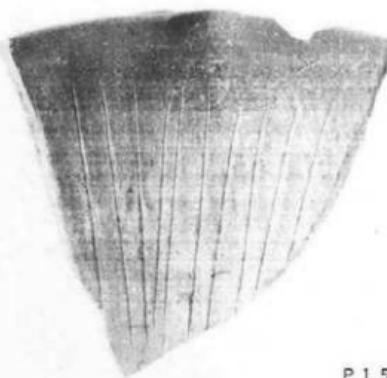
W 0 4



W 0 6



P 13



P 15



P 13



P 14



W 07

PL. 12



PW 0 1



PW 0 2

彦根市埋蔵文化財調査報告第11集

特別史跡彦根城跡発掘調査報告書 I

— 彦根市立彦根西中学校校内武家屋敷跡 —

1985

編 集 彦根市教育委員会

発 行 彦根市教育委員会

印 刷 サンライズ印刷株式会社

